
猫

泰然自若

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猫

【コード】
N4925M

【作者名】
泰然自若

【あらすじ】
いつもの朝。いつもの道。見知らぬ猫。

人は目の前で予期せぬ事が起きた場合、何かしらの動作を行う事を忘れてしまう。

今、目の前に繰り広げられた一幕。

猫が車に轢かれ、車はそのまま走りぬげ、猫は突き飛ばされ宙を舞う事もなく、鈍い衝撃音の後に道路の隅で息絶えた。

呆然としていたが、直ぐに猫を直視できなくなると共に、強烈な吐き気が襲ってきた。見る機会など滅多にない。見たくも無いものを見せられた。

見知らぬ猫。何処にでも居るような茶色の猫だった。何処にでも居る、見知らぬ猫。

その猫の屍骸を見ただけで、目の前で死んだ猫が長年飼って来た家族のように可愛がった猫という存在であるかのような、猛烈な哀しみと屍骸を見たという嫌悪感が津波のように押し寄せてきた。

朝食が今にも、アスファルトを染め上げる勢いで登ってきていたのだが、ふと我に返ると何故、こんなにも慌てているのかという考えが沸き起こってくる。

見知らぬ猫という事を理解していながら、動物であり猫という種の死を目の当たりにした事によってその猫を飼っていたであろう人間に感情移入したとも言うのだろうか。
歩を進めながら、その現場を後にする。

朝は始まったばかりであるが、その屍骸をどうこうするにしても、方法が思いつかないばかりか、飼い主でもないのに何故、態々何かしなればならぬのかという疑問を浮かべた。

その疑問によつて、また、何時もと同じ日常の朝が始まる。

見知った道を通り、見知った建物に入り、見知った人に挨拶をし、見知った椅子に腰を降ろし、見知ったディスプレイを眺めながら、見知らぬデータを入力をする。

それが日常。日々の平穩。やがて、夕暮れとなり、見知った道は帰り道となつて目の前を走っていく。

日常の中の僅かな変化をかみ締めながら、朝の現場へと辿り着く。既に屍骸は消えうせている。そこには、何の痕跡もなかった。

何時もと変わらない道路にアスファルトが昼の熱を帯びているように暖かいだけで、違いは街灯が灯り夜を消し去ろうと無意味な努力をしている事くらいである。だが、何故だろうか。

手をアスファルトに触れさせながら、熱を感じ取る動作を行った。屍骸のあつた場所をまだ覚えていた事も不思議であつた。

生暖かい湿気の強い夜風が街路樹を揺らし続け、今夜も寝苦しい事この上ないだろうという思いを強めさせる。

足が動かないのは気のせいではないが、どうにもこうにも気分が収まらないのだから仕方がない。膝を折つたままの状態で手を合わせた。

何故、そうしたのか。そうしなければならぬ気がしたのは確かであつた。

眼を瞑り、何かを悼む。朝の光景全てをただ、悼む。

ニヤア

何処かで猫の鳴き声が聞こえた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4925m/>

猫

2010年10月16日00時03分発行